ひょうたん島通信

大槌発! 第31回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

震災から6年目を迎えて ～記録を続ける～

福田秀樹 大気海洋研究所 附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

2016年3月29日、城山公園体育館より。

多くの悲しみをもたらした東日本大震災から5年が経ち、復興に向けた歩みも6年目を迎えました。今回、紹介させていただいている写真は、大槌町城山公園体育館の横から大槌町役場旧庁舎方面を写したもので、震災から1年弱の第1回、約3年の第18回、約3年半の第24回で紹介されている写真とほぼ同じ場所を写したものです。第24回のものと比べると、町の中心部のかさ上げが進んでいる様子や、大槌川の向こう岸に民間企業の社屋が増えている様子が見て取れます。大槌町では、この一年で復興に向けた街づくりが急速に進み、新しい街の姿を感じられるようになってきました。

このような風景の変化は残っている写真を比較することで捉えることができますが、全国の研究者が参加している文部科学省の東北マリンサイエンス拠点形成事業では、陸の上からは直接見ることができない海の中の様子を記録しながら、震災が三陸の海に与えた影響を解明しようとしています。私自身は大槌湾を含む三陸沿岸の海水中に溶け込んでいる栄養塩類をはじめとした溶存態・懸濁態物質の調査に参加していますが、現在の海の状態と震災の間の関連を明らかにするためには震災前後の様々な期間との比較が、やはり有効な手段です。しかしながら震災後の情報に比べて震災前の情報は量的にも質的にも乏しく、調査で日々蓄積していく結果の解析を行いながら、「これは震災の影響だろうか？ それとも稀ではあっても震災とは無関係に生じうる現象だろうか？」という疑問に頭を悩まされると、平時から記録を残していくことの重要性を実感させられます。とは言うものの、限られた労力では、全てを記録することが出来るわけではないのも事実です。海の中の何を優先して記録していくべきなのか？ という疑問に当たった時に、我々の記録と解析の過程がその判断の助けになれば幸いです。

大気海洋研究所を中心としたチームは、東北マリンサイエンス拠点形成事業での取り組みを一般向けの広報誌「メーユ通信」にて紹介しています。この5年間で分かってきたことをまとめた第5号が以下のサイトからダウンロードできますので、興味のある方は是非ご覧ください（プロジェグランメーユhttp://teams.aori.u-tokyo.ac.jp/ページ右側の「メーユ通信」バナーをクリック）。

調査船 弥生のつぶやき

国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

薄れゆく静寂の日々の記憶

「薄れゆく震災の記憶」が話題となっていますが、被災地に居れば忘れることなどできるはずがありません。どこかへ行く時、誰かと話をする時、常に震災を思い起こします。でも、先日、これと異なる「薄れゆく記憶」に思わず襟を正しました。震災から5年目となる3月11日。ほとんどの工事が中断され、「大槌町東日本大震災津波追悼式」が大々的に執り行われました。穏やかな日差しの中、目を閉じて犠牲者の冥福を祈れば、聞こえてくるのは風と波と葉ずれの音だけ。その時、ハッと気がつきました。2013年11月12日に竣工した私には、黒煙を噴き上げるブルドーザーや埃まみれのダンプカーの重々しいエンジン音が当たり前の日常でした。しかし、それは震災から立ち上がろうとする町の悲鳴であり、この清々しい静寂こそが本来の大槌のはずなのです。被災地では人の入れ替わりも激しくなっています。こうした中では震災のみならず、それ以前の姿もしっかりと記憶に留めておくことが必要だと感じました。

小学生の手により震災前の大槌を知るサケたちの子供が放流されました。彼らが戻ってくる4年後、この町はどのような変貌を遂げているのでしょう。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）